

2017 2/28 第26号

ふくしま 再生 短信

2017/2/25 東京・ワークショップ報告

※ 私たちに何ができるか？ ※



宗夫さん



分科会2



永徳さん



分科会1



聡太さん



分科会3

2017年2月25日午後2時、東銀座のJJK会館でふくしま再生の会ワークショップ「帰村が始まる飯館村 私たちに何ができるか」が開催され80名の会員と関係者が参加。分科会1は小原壮二さんの司会＜帰村開始後の環境放射線・放射能総合測定とデータ提供、帰村後に何ができるか＞、分科会2は中町芙佐子さんの司会＜健康・医療・ケアの実践＞、分科会3は大永貴規さんの司会＜農林畜産業の再生＞、をそれぞれテーマとして意見交換・体験交換・今後に向けての具体策を討議。

「帰村開始」というたいへん緊迫した状況を押して飯館村から、菅野宗夫さん、菅野永徳さん、佐藤聡太さんが参加。各分科会のまとめ報告と質疑で、田尾陽一さんから「現代版炭焼きとしてロケットストーブの稼働実験を開始、自然との新たな共生のかたちを模索し

たい」との報告あり。

軽食休憩の後、6時から全体会合に入り、アーカイブの開発（栗山俊一郎さん・高木浩子さん）、農業再生・地力とは（溝口勝さん）、佐須地域コミュニティ（宗夫さん・永徳さん・田尾さん）の報告に続き、国立環境研・明大農学部・東大農学生命科学研究科・プラチナギルドの会・渥美財団SGRA・東大”いいはな”、などの協働団体から挨拶あり。全体質疑で宗夫さん「村に＜戻る＞のではなく＜新天地を切り開く＞」。活動体制報告（二宮克彦さん）のあと田尾さんは「7年目迎え会員の健康管理が大切」と結んだ。9時丁度片づけ含め長丁場の全日程終了。最大級の企画、事務局メンバーはじめ準備から実施まで支えていただいたみなさまお疲れ様でした。ありがとうございました。（文責&撮影・若林一平）



栗山さん



全体会合

ふくしま 再生 短信



1

雪とバイアルそして協働

全村田圃土壤測定プロジェクト同行記PART2



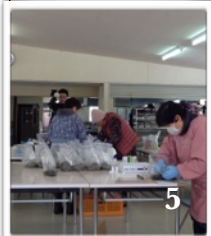
2



3



4



5



6



7



8

【写真説明】1. バイアル（試料瓶）を手に説明する齋藤富子さん。2. ～ 6. 実際の試料詰め作業。7. 採取した土壌と試料詰めを待つバイアル群。8. 一同で。背景写真は作業が行われた再生の会霊山センター。

2017年1月29日午前9時、深い雪に覆われた再生の会霊山センターにおいて全村田圃土壤測定プロジェクトの試料のバイアル詰め作業が行われた。バイアルに詰められる土壌の採取は、各行政区毎にその村民が参加して行われている。

冒頭サークル「までい」の齋藤富子さんから作業の流れとバイアル詰めの実際について説明があり、計7つのテーブルに分かれて作業が始まった。プロジェクト全体は、飯舘村との28年度業務委託契約により業務を受託したふくしま再生の会により実施されている。この日村民から、高橋あけみさん・菅野和子さ

ん・菅野忠子さん・菅野啓一さん・菅野千恵子さんが、再生の会メンバーと共に作業に参加。バイアル詰め作業を請け負ったいいたて協働社の菅野宗夫さんも応援に駆けつけた。

正確な土壤測定のためには均質な状態でのバイアル詰めが必須となる。細心の注意と工夫が求められるところである。昼食をはさんで午後3時この日の全作業を無事終えた。

試料詰めを終えたバイアルはサークル「までい」に送られ基礎データ入力後に東大農学生命科学研究科研究室で測定が行われる。バイアル詰めは次週以降も続けて実施される。

（文責&撮影・若林一平）

ふくしま

再生 短信



イルミ輝け再生の道

「花仙人と作るいいたて花壇」プロジェクト同行記

いいたて花壇フィールドモニタリングへ→

HOME
2017/03/19 22:44:52

【写真説明】1. 花仙人こと大久保金一さん。2. バラ博士・中村昭良さん。3. バラ苗木。4. 水仙の株。
5. チームで取り組む作業現場。6. 飯館の地区を形どる石に沿ってイルミネーションケーブルを設置。7.
金一さん（右）と聡太さん。【背景写真】マキバノハナゾノに帰ってきた金一さんの走行ライトを迎え
る「いいたて花壇」イルミネーション（[東大・溝口勝研究室フィールドモニタリング](#)より）。

2017年3月19日午後、東大の学生グループ「いいはな」（リーダー：佐藤聡太さん）による「花仙人と作るいいたて花壇」作業

に同行した。再生の会のメンバーを含めて30余名が参加。花壇構想は東大農学生命科学研究科国際情報農学研究室教授・溝口勝さん指導による農学国際特論Ⅰ/東大GCLワークショップ「飯館村までいかな農村計画2015 除染後農地におけるICTを用いた花園計画」（石渡尚之さんからチーム総勢9名）を端緒とする。学生たちが行き場の無いフレコンバッグのピラミッドに衝撃を受けながらも希望を見据える大久保金一さんの眼光に共鳴して、花園構

想はついには講義の枠を超えて邁進するプロジェクトになった。

この日の作業は、バラの苗木、水仙の株、そしてイルミネーションのケーブルをそれぞれ担当する3チームに分かれて進んだ。金一さんの畏友・中村昭良さん（茨城バラ会・会長）からバラの苗木と栽培について貴重な指導をいただいた。作業のあと川俣町の「おじまふるさと交流館」に移動、地元しゃも料理の夕食に続いて花仙人を囲む懇親のひとときがもたれた。熱いエール交歓のあと金一さんは二日目の作業に備えるべく花仙人を待つマキバノハナゾノへと向かった。（文責&撮影・若林一平）

ふくしま 再生 短信

相馬郡飯館村立旧佐須小学校訪問記

✕ 夢を育む小学校校舎 ✕



2017年1月29日午後、再生の会のメンバーは菅野永徳さんの案内で旧佐須小学校を見学した。佐須小学校は明治10年

(1877年)

菅野庄太氏宅で開校した佐須簡易小学校に端を発し、新館尋常小学校佐須分教場(明治25年)等の校名の変遷を経て飯館村立佐須小学校となる

(昭和40

年：1965年)。昭和52年(1977年)に草野小学校に統合されて歴史を閉じるまでの100年間にわたり村の枢要な学びの場であり続けた。その後は公民館として村民同士の交流をはじめ、村の迎賓館の役割も担ってきた。

小学校は自然と人間の共生関係を心身を通して学ぶ最初にして最良の機会である。佐須小の校歌は共生関係再生の道標であり希望だ。40年整然と保存されてきた教室の生きた姿を目の当たりにして村の人びとの知恵の深さに頭が下がった。(文責・写真：若林一平)

校歌 佐須小学校のうた

詩 高橋新二 曲 紺野五郎

贈 毎日新聞福島支局

峠から松 みどりも 若く
牧野のどかに 牛もよんで
佐須の春秋 花と月
たのしい窓に 友がまつ
きのうも きょうも またあすも

小川きよらか すずらん映し
海へはるばる 夢をひろげる
佐須の山かげ 雪の日も
ちからをつくし 学びあう
ぼくたち わたしら きみ あなた

御山 雲抜き 霊山 ひかえ
社太鼓が こころ ひびかす
佐須のふるさと わすれずに
飯館みちをみなすすむ
げんきに ほんきに こんきよく

写真説明(時計回り):教室のストーブ。そのまま残る図書の一部。校舎外観。教室の時計。人びとの交流のため設営された囲炉裏。小学校を案内していただいた菅野永徳さん。

ふくしま
再生 短信

地 産 地 消 エ ネ ル ギ ー の 原 点

❖ 山津見神社の水力発電 ❖



水圧管路

2014年11月2日、劇的出会いの日、真野川の溪流に今なおその姿をとどめる山津見神社の水力発電所を訪ねた。無論現在は稼働していない。真野

川上流から導水路を通ってきた水流は落差を設けた「水圧管路」を一気に下降し、「水力タービンを回して発電機に動力を伝え」た後、放水口から真野川に流れ出る。これらの基本設備をほぼ無傷の状態で見学することができた。80年以上も前に設置された設備と聞いてはいた。だからこそある「謎」が記者を捉えて離さなかつ

た。それは何故あの大戦中にタービンや発電機が「金属の供出」を免れることができたのかという疑問である。戦争末期には金属不足で陶器製の手榴弾も作られていたのだから。答えは『飯館村史・第1巻 通史』にあった。

1929年（昭和4年）、山津見神社宮司の久米松太郎は真野川から導水路を分流し、神社前まで誘導して落差

を確保し（目測で約9m）3キロワットの発電機を回転させて水力発電方式による自家発電を開始し、社務所に配線し点灯に成功している。おそらくこの地域にお

ける最初の電灯は同年（1929年）の11月の山津見神社の大祭に間に合った、と村史は記述している。水力発電による点灯は夜に行われ、日中は蓄電池に充電した電気を利用してラジオを聞くことができた。東北地方のラジオ放送は1928年に始まっていた。大戦中の資材の不足の苦難の時代を経て東北電力による配電が行われる1955年3月1日まで山津見神社の自家発電は行われたのである。（前掲書、712-713頁）

「謎」は解けた。山津見の発電は大戦をくぐり抜けて戦後復興期まで26年間の文字通り風雪の日々の営

みを止めなかった。「供出」以上のかけがえのない価値を生み出し続けた。今年も11月の大祭の日には地産地消エネルギーの「種蒔く人」久米松太郎宮司を偲びたいとおもう。（文責&撮影・若林一平）



今なお堅牢な放水口の石垣



タービンと発電機

最初の挑戦はバイオエネルギー。自前の点灯の最初の挑戦者は菅野庄太である。1927年、庄太は自宅の前庭にメタンガス発生装置を設営し

た。傾斜面を利用して板材を使った大きな水槽を作り、これに青草や木の葉、残菜などを入れてメタンガスを発生させてそれをガス管に誘導し

て点灯しようとする試みである。しかし結局この試みは実を結ばなかった（前掲書、712頁）。村民の開拓者精神には舌を巻くばかりである。